

続・珈琲の思い出十一

和樹が息子と一緒に私のお話会に通うようになって3ヶ月目の時だったか、お話会が終わった後で、思い切ってこちらから話しかけてみたことがあった。

息子と楽しそうに話をしている彼の笑顔を見るだけで、私の体は熱くなり、頬が赤くなるのが自分でもわかるほどだった。私は深呼吸を一つすると、一歩前に踏み出した。

「こんにちは。佑樹くんのお父さんですよ？いつもお越し下さってありがとうございます。」

一瞬和樹はぎょっとしたようにこちらを見た。が、私は構わず続けた。

「いつも佑樹君が楽しそうにお話を聞いて下さるので、私もすごく嬉しいんですよ。」

「いや、そうですね。ゆ、優子さんのお話がですね、とても、なんというか、す、素敵なのでですね。あの、僕もとても楽しいんだと思います。」

穏やかな声で木訥としゃべる彼の言葉を聞いて、私は心の底から嬉しくなって微笑んだ。しかも、名札に書いているとはいえ、私の名前をちゃんと呼んでくれたことに感動した。

「あはは、ありがとうございます！そう言っただけだと嬉しいですよ！またいらして下さいね。」

私がそう言うと、驚いたことに彼は首元まで真っ赤になってうつつむいてしまった。

「お父ちゃん、どうしたの？お顔が真っ赤になってるよ」と佑樹君に指摘されてしまうほどだった。

和樹はどう思っただろうか？突然話かけるだなんて、なれなれしい女だと思っただろう。次もこんなチャンスがあればいいな。そう心に近いながら、私は店を出ていく彼の後ろ姿を見つめていた。